

## 安養報化の事

中 川 善 教

と為す。

一  
安養という言葉の語源の問題は暫く措き、『正法華經』第九卷「藥王菩薩品」の於是壽終生安養國見無量壽仏（大正藏一、二、二二六頁下）の文にまかせて、西方阿彌陀如来の淨土安養世界の土体は、唯報仏の土か或は化仏の土か、又は報化二土に通ずるものか、要は二乘凡夫が安養世界に往生し得るか否かにかかるとの問題であるが、性相義字の立場より一応これを整理したいと思うのである。

仏の三身に就ては多くの説があるが、極めて常識的には『法華玄論』第九（大正藏三四、四三七頁上）に云う如く、

若し法華論に三身を明さば、仏性を以て法身と為し、修行して仏性を顯すを報身と為し、衆生を化ずる義を化身

と定義される。『法華玄論』には続いて『撰大乘論』所明の、法身に二を開き、応身にも化菩薩と化二乘に約して報化の二を開く等の説が挙げられてあるが、『撰大乘論』の三身説については、田中順照教授に『密教文化』第六二号所載「撰大乘論に於ける三身」があるから、就て見られたい。三身の称呼の法報応・法応化等の異りにについても、傍論多岐に亘るから今は触れまい。『成唯識論』第十卷には究竟位を論ずる段の三身別相門に、自性・受用・變化の三身を出している。受用身は報身に当るのであるが、その受用身に自受と他受の二種を開いて、次のように説明している。

一には自受用。謂わく諸の如来の三無數劫に無量の福と慧との資糧を修集して、起したまえる所の無辺の眞実の

功德と、及び極めて円かに淨き常と遍との色身とぞ。相  
続せり、湛然なり。未來際を尽して恒に自ら廣大の法樂  
を受用す。

二には他受用。謂わく諸の如來の平等智に由つて示現し  
たまえる、微妙の淨功德身ぞ。純淨土に居して十地に住  
せる諸の菩薩衆の為に、大神通を現じ、正法輪を転じ、  
衆の疑網を決して、彼れをして大乘の法樂を受用せし  
む。

この二種を合して受用身と名づく。

この説に依ると、報身とは、因位の願行に報うた受樂の仏身  
で、未來際を尽して恒に自ら廣大の法樂を受用し、變易身の  
菩薩衆の為に觀察智に由つて大神通を現じ、大乘の法樂を受  
用せしむるものである。

同じく變化身については、

謂わく諸の如來の、成事智に由つて変現したまえる、無  
量の隨類の化身ぞ。淨・穢土に居して、未登地の諸の菩  
薩衆と二乘と異生との為に、彼の機の宜しきに称いて通  
を現じ法を説いて、各に諸の利樂の事を獲得せしめたま  
う。

と云うから、隨類の化身で、三賢の位の菩薩と二乘と凡夫と  
を化益する位であることが知られる。何れも直接化他の当体  
であるが、その対告を地上と地前に分つて報化の差が生ず  
る。

報化二身に於ける如く、その所依の土にも差がある。

自受用身は還つて自土に依る。謂わく円鏡智と相應する  
淨識いゝ、昔修せし所の自利の無漏の純淨の仏土の因縁成  
熟しぬるに由つて、初めに仏と成りしより未來際を尽し  
て、相続して純淨の仏土を變為すること、周円無際にし  
て衆宝に莊嚴せられたり。自受用身いゝ常に依つて住せ  
り。淨土の量の如く身量も亦爾り。

他受用身も亦自土に依る。謂わく平等智いゝ大慈悲の力  
をもつて、昔修する所の利他の無漏の純淨の仏土の因縁  
成熟したまえるに由つて、十地に住せる菩薩の所宜に隨  
うて淨土を變為すること、或は小に、或は大に、或は劣  
に、或は勝にして前後改転す。他受用身は之に依つて住  
したまえり。

自受用身は、「此の仏の身と土とをば俱に色に撰むるに非ず」  
と云われる自性身と、余程近い性格を持ち、他受用身はやや

具象に近く表現されているが、これは報身の持つ二つの面である。

若し変化身は変化の土に依る。謂わく成事智い、大慈悲の力をもつて、昔修せし所の利他の無漏の淨穢の仏土の因縁成熟したまえるに由つて、未登地の有情の所宜に随うて仏土を化爲すること、或は淨に、或は穢に、或は小に、或は大にして前後改転す。仏の変化身は之に依つて住したまえり。

以上に依つて『成唯識論』がまとめた、報化二身とその依土の性格は大体明かである。

## 二

上に挙げた『成唯識論』の三身段から、安養世界が報化二土の中何れに属するかと云う問題が、展開されてくるのであるが、『成唯識論』に直結するものとして、三箇疏中の『枢要』下巻、『演秘』七末があり、慈恩大師には外に『仏土義林』がある。少し遡つて慧遠法師の『大乘義章』第十九卷の淨土義、更に遡つて龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』『大智度論』も無視出来まい。

弥陀の淨土を説いた經典の数は夥しいが、その中で『般舟三昧經』『大阿弥陀經』『觀無量壽經』『悲華經』等に頼つて、この問題の経過を眺めてゆきたい。

三卷本の『般舟三昧經』上巻の「行品」に、如来が毘陀和 (Badrapāla) に、修行に依つて現在諸仏悉在前立三昧を得ることを説き、その三昧の例として西方阿弥陀仏の極樂世界を出してある。(大正藏一三、九〇五頁上)

是の如く毘陀和、其れ比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷有り、戒を持つること完具し、独り一処に止まり、心に西方阿弥陀仏今現在したまうを念じ、聞く所に随うて当に念ずべし。是の間を去る千億万仏刹、其の国を須摩提と名づく。衆の菩薩の中央に在つて經を説けり。一切常に阿弥陀仏を念ず。

一卷本の『般舟三昧經』の「行品」にはこの記事は無い。続いて見仏の例を夢中の二三の事例に依つて説明するのであるが、その中に、三人の男が見たことも無い三人の婬女に対してそれぞれに婬意を起し、夢中にその婬女の所に到つて共に棲宿したと云う例を挙げているのは、一体どういうことであろうか。まあともかく、この国土に於て阿弥陀仏の御名を聞

いて、しばしば念じて休息有ることなければ、阿弥陀仏の国に生ずることが出来るということが説かれてあつて、須摩提(Sumathi)に生ずる時の地位に就ては説くところが無いが、衆の菩薩に囲遶せられて経を説いていられるのが、西方浄土の阿弥陀如来の現在の姿である。

月支の支謙居士の訳した謂わゆる『大阿弥陀経』は、阿弥陀如来因位の二十四願を説くを以て聞えた経であるが、上巻に因位の修行を説いた後に浄土の相を示して、

仏、阿難に告げたまわく、阿弥陀作仏已来凡そ十小劫、所居の国土を須摩提と名づく。正に西方に在り、是の閻浮提地界を去る千億万須弥山仏国。其の国の地皆自然の七宝なり。○ 其の國中悉く諸の菩薩阿羅漢にして婦女有ること無く、寿命無央数劫、女人往生すれば即ち化して男子と作る。(大正蔵一一、三〇三頁中下)

と云い、下巻の終に近く、多くの他方仏国の菩薩が、阿弥陀仏国に往生すべきことを説いている。この経の上巻の終に近く、「仏言。阿弥陀仏至其然後般泥洹者。其蓋楼亘菩薩便当作仏」(大正蔵一一、三〇九頁上)と阿弥陀如来の涅槃、観世音菩薩の補処を説いているのは注意を要する。

安養報化の事

涅槃する阿弥陀仏が無量寿仏になり、因位の二十四願が増広されて四十八願になる『無量寿経』では、上巻に、

仏、阿難に告げたまわく、法藏菩薩今已に成仏して現に西方に在り、此を去る十万億刹なり。其の仏の世界を名づけて安楽と曰う。阿難又問いたてまつる、其の仏成道已来いくばく時を経たりとせん。仏の言わく、成仏已来凡そ十劫を歴たり。其の仏の国土自然の七宝なり。(大正蔵一一、二七〇頁上)

阿弥陀仏の浄土の聖衆については、同じく上巻に、  
仏、阿難に語げたまわく、彼の仏の初会の声聞衆の数称げて計す可からず。菩薩も亦然り。(同頁中)

既に因位の四十八願に、「国中人天」「国中声聞」「国中菩薩」と冠し、その諸願を成就したる以上、その浄土に人・天・声聞・菩薩の止住することは明かである。従つて下巻の能依の人と所依の土の勝れたるを説く段(二七四頁中)に、「無量寿国の声聞菩薩の功德智慧、称げて説く可からず」とある。

『無量寿経』の三輩往生は、一転して『観無量寿経』に至つて九品往生を説かれるが、声聞の位に中三品を立て、凡位に於て下三品を説いてある。(大正蔵一一、三四五頁中下)中

品上生の者は、諸戒を修行し罪を造らざる善根を以て、極楽世界に生ぜんと願求し、命終の時に臨んで阿弥陀仏の迎接に遭うて極楽世界に往生し、坐するところの蓮華尋で開くことを叙して、

華の敷く時に当つて、衆の音声、四諦を讚歎するを聞く。時に応じて即ち阿羅漢道を得、三明六通あつて八解脫を具す。是を中品上生の者と名づく。

中品中生の者は半劫を過ぎて阿羅漢となり、中品下生の者は一小劫を過ぎて阿羅漢となる。下品上生の者は阿弥陀仏名を称うるに依つて、五十億劫生の罪を除き、化仏化觀世音化大勢至に迎えられて往生し、十小劫を経て百法明門を具して初地に入る。下品中生の者は、往生して大乘甚深の法を聞いて、時に応じて無上道心を発す。下品下生の者は、往生して広く実相除滅罪法を説くを聞いて歡喜し、時に応じて菩提の心を起すのである。

四十八願が無諍念王の五十一願に増広される『悲華經』では、穢土成仏の積尊の慈悲を、分陀利華（白蓮花）に譬えて讚嘆するのであるが、無諍念王が無量寿如来となつて住する安樂世界の、原初の尊善無垢世界の様を、無諍念王發願の後

に、（大正藏三、一八四頁下）

大王、汝西方過百千万億仏土を見よ、世界有り尊善無垢と名づく。彼の界に仏有り尊音王如来應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師仏世尊と名づく。今現在諸菩薩の為に正法を説く。彼の界に声聞辟支仏の有名ること無し。亦小乘法を説く者有ること無し。純一大乗清淨無雜なり。其の中の衆生等一に化生し、亦女人及び其の名字無し。

と出してある。『大悲分陀利經』第三卷（大正藏三、二五〇頁中）にも大同の文がある。

支謙居士の訳した『慧印三昧經』には、瓶沙王の第一夫人で阿闍世王の母である拔陀斯利と、拘隣の女巨那臘の為に、慧印三昧を持つることによつて、男子となつて須摩訶に生まれ阿弥陀仏を見たてまつることを、偈を以て説いて、（大正藏一五、四六五頁上）

其の刹に愛欲無く、亦三惡道無し。常に無央数の諸の菩薩を以て僧とし、亦阿羅漢の名有りと道うを聞かず。

と云う。同本の異訳『如来智印經』には、拔陀斯利を賢首、巨那臘を金光と訳してあるが、兩人に對する世尊の偈（大正

藏一五、四七二頁上)に、

彼の仏国土に魔事無く、悪業報無く胎生無し。日々に無量の菩薩の集まること有つて、又声聞縁覚の名無し。

とある。

### 三

次に論蔵に文証を求むれば、『大智度論』第三十四卷には、我当以無量阿僧祇菩薩摩訶薩為僧の經文を積すところに、

阿弥陀仏国の如きは、菩薩僧は多く、声聞僧は少し。是を以ての故に無量の菩薩を以て僧と為さんと願ず。(大

正藏二五、三一一頁下)

と云うが、同じ龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』第五卷の「易行品」には、阿弥陀仏を念じ名を称し自ら帰することに依つて、不退位に入つて無上正等菩提を得ることを述べて、それを称讚する偈の中に、(大正藏二六、四三頁中)

彼の国土に生ずる者は、我無く我所無く、彼此の心を生ぜず、是の故に稽首して礼す。三界の獄を超出して、目は蓮華葉の如く、声聞衆無量なり。是の故に稽首して礼す。

として、ここでは阿弥陀仏国に無量の声聞衆が住しているのである。同じ偈の中に「十方の諸菩薩來つて供養し法を聴く」とある。隋の浄影寺慧遠法師が大乘の深義を詮明せんとして、仏教の要目を集めて評釈した『大乘義章』の第十九卷の初に、浄土義を六門分別する中第二の弁相に、事浄土、相浄土、真浄土の三に分ち、事浄土の中三を開き總相に「是凡夫人所居土也(大正藏四四、八三四頁上)」と云ひ、第三の四諦に約して弁じて其の相を定むる中に、

無量寿国は三界に属せず。彼しこに貪欲無きが故に欲界に非ず。地に在るを以ての故に色界と名づけず。形色有るが故に無色界に非ず。是の相似道家の果を以て之を撰して道に属す。故に苦と名づけず。仏の浄土に似たれば菩提道に撰す。当分に実論ずれば体は是れ苦諦、生滅の果の故に。有漏報身の所依処なるが故に。(同上八三四頁中)

と阿弥陀仏の浄土は三界に属せざることを評取している。第四の身土を明す段に、土が身に随う例として「弥陀仏未だ成仏せざる前の国土は鄙穢、成仏後の国界嚴浄なるが如し」と、安養浄土の嚴浄を謡っているが、その次の凡聖有無門に

於ては、『維摩經』等を挙げて一般論に終り、特に阿弥陀仏國について述ぶるところはない。

智周大師の『唯識論演秘』七末（大正蔵四三、九七六頁下）

には、伝に兩積有りとして、

一に云く、二乗と異生とも亦生ずるが故に。觀經等に皆誠説あるが故に。瑜伽撰論に生ぜずと云へるは、受用の土に拠つて化土をば遮せず。

二に云く、生ぜず。瑜伽撰論に自ら会せるを以ての故に。又大乘同性經に淨土成仏と云う、皆是れ受用身なり。穢土の中の者皆是れ化身なりといえり。故に知んぬ、化身の所居の土をば淨と名づくることを得ずということ。此に淨土と言うは暫變に依つて説けり。即ち法華に三たび淨土に變ずというが如くにして、維摩等も同なり。

詳かんじて曰く、今、前の説に同ず。多くの經論の中に淨に生ずと説くが故に。

等と云うて第一説を評取してある。これは變化身所居の土を淨土とした時、その淨土が暫變か長時かということより起つた評論であるが、この「詳曰今同前説」というのが果して

『演秘』の評取せる正義か否かに就て問題が残る。慈恩大師の『唯識論概要』下卷末（大正蔵四三、六五七頁下）には受用土の有無論について次の如く述べている。

自受用の土は唯淨無漏なり。余は見ざるが故に。唯仏のみ知りたる所なり。

他受用の土は本は唯無漏の淨なり。見る者唯淨なり。一切不善と諸の異熟果と皆已に無きが故に。然るに有無漏に通ず。

慈恩大師には別に『大乘法苑義林章』第七末に仏土章があつて、八門を以て仏土義を明してあつて詳密である。その第三の因行を明すところに報化二土の問題が出ている。

一に云く、撰大乘等に準ずるに西方は乃ち是れ他受用土なり。觀經に自ら阿鞞跋致の不退の菩薩方に生ずることを得と云うが故に、少善根の因縁を以て生ずることに非ざるが故に。無着と天親とは淨土論に女人根缺二乘種等は皆生ぜずと言うが故に、撰大乘に云く、唯願に由つて方に乃ち生ずることを得るに非ず。別時の意なるが故に。一錢を以て貨して千錢を得るは別時に方に得、今即ち得るに非ざるが如し。十念して往生するも亦復是

の如し、十念を因として後に方に漸く生ず。十念するに由つて死後即ち生ずるに非ず。懈怠を除き、善を修せざる者に其をして仏を念ぜしむるが為に、十念の因浄土に生ずと説くが故に。

一錢を貸して千錢にするが如き多時の修行を経なければならんということが、女人や不具者や二乗種等の西方浄土に生ずることの出来ぬ理由である。次に西方浄土が報化二土に通ずる説を出し、報土の文証は右の通りと示して、化土の証に『阿弥陀鼓音声王陀羅尼經』と『觀無量壽經』を挙げてある。

二に云く、西方は報化二土に通ず。報土の文証は前の所説の如し。化土の証といつば、鼓音王經に云く、阿弥陀仏の父を月上と名づけ母を殊勝妙顔と名づく。子有り魔有り亦調達有り亦王城有り。若し化身に非ざれば寧ぞ此の事有らんや。故に觀經に九品生を説く中に阿羅漢須陀洹等有るが故に、彼しこに生ずる者通じて三乗有り。其の土は通じて是れ報化二土なり。

西方浄土が報化二土に通ずるといふ文証を挙げておいて、実はこれは仮説で二乘凡夫の姿を示現或は名を借りたに過ぎぬ

と評判してある。曰く、

若し前解に依れば、此は是れ他受用身示現して亦父母王国有り、実には即ち之無し。実には女人惡道怖等無し。

九品生の中に阿羅漢等は彼の名を借りて説く、実には是れ菩薩なり。二釈、情に任せて取捨すること意に随え。

即ち西方浄土は唯報土の義を確立しているのである。しかし他受用土は決して凝然固定したものでなく、修行の程度に応じて小大劣勝と価値を殊にして現出することが、次の第四果相門の中に述べられてある。(十丁右七行)

他受用の土は十地の菩薩の所宜に随つて現ず。或は小或は大或は劣或は勝、前後改転す。

その証文として『梵網經』『撰論』を援引している。

次に処所については、他受用土は別して指すべき土無く、心の淨き処即ち浄土の処なりと云う。(十一丁左五行)

若し他受用土は或は色界の浄居天上に在り、或は西方等処所不定なり。法華に亦言く、衆生、劫尽て大火に焼かると見る時、我が此の土は安穩なり、天人常に充滿せりと。十地の所見は乃ち是れ報土、地前の所見は乃ち是れ化土なり、宜しきに随つて現ず、何ぞ方を定めて別して

一処を指すことを得ん。衆生をして勝れたる欣心を起さしめんと欲して別に処所を指す。心の淨処に随つて即ち淨土の処なり。

謂わゆる唯心淨土義を展開し、従つて淨土は界繫に非ざる由を述べている。

古人此に於て種種に分別して、三界の外に別に処所有り以て淨土と爲す。理必ず爾らず。所化は必ず異熟識在ること有り。異熟識在らば必ず是れ三界の撰なり。何ぞ界を出づることを得ん。界繫に非ざるに由つて三界を超ゆと言ふ。処として別有るに非ず。所化に随うが故に。

然らば如何にして淨土を建立することが可能になるのか。『義林章』はその次の諸門分別の中に、(十三丁右五行)

諸仏の慈悲、自識の上に於て菩薩の宜しきに随つて微妙の土を現す。菩薩は自の善根と願力とに随つて、自識の上に仏の所生の淨土に似たる相現す。是れ自心各別に變現すと雖も、而も同一処にして形相相似するをもつて、謂わく一土に共に其の中に集ると爲す。

因論生論談柄いささか枝葉に及んだが、猶「他受用土は菩薩を真と爲し、二乗八部を皆權現と爲す。是れ真実の中に生ず

ることを得るに非ざるが故に(十四丁左四行)」ともあれば、慈恩大師の淨土義の大概はその要を得たるに近い。要するに安養世界は報土に限るといふのが、慈恩一家の正義というところである。

ただ先きに挙げた『演秘』に「今同前説」と云うて、二乗異生が西方淨土に生ずる説を評取せるかの如く見らるることが問題になる。若しこれを文相の如くに前説を評取せるものと見るならば、安養世界は単に報仏土にとどまらず、化仏土に安養世界を認めることになる。いやしくも唯識三祖の一人に挙げられる撲揚大師智周が、唯識家相伝の説を逸しては看過し得ることではない。何としても会通し解決しておかねばならんことである。依つて『唯識論同学鈔』がこれをとりあげている。(大正藏六六、五八五頁下) 即ち前引「今同前説」の文を評取の文と見て、一応、

明かに知んぬ観經の説に任せて、異生等西方に生ずることの積、指南の実義と云う事を。

とこれを肯定し、さてそれについての疑問を打出している。

続きの文に、

若し之に依つて爾らば、大師処の解釈を見るに、多く

西方唯報仏土の義を存すと見えたり。如何。

と問を發して、答うるに宗家処処に作れる二釈を以てしている。即ち唯報仏土説と通化土説のあることを示して、先づ「其の中に唯報土の釈は宗家所存の実義也と見えたり」と結論して、数々の証文を摘出してゐる。既に『瑜伽論』七十九卷（大正蔵三〇、七三六頁下）に、前巻終に近く、諸の穢土と浄土中の得易きものと得難きものを出した後を受けて、

清浄世界中に於て、那落迦・傍生・餓鬼を得可き無し、

亦欲界色無色界無し、亦苦受の得可き無し、純菩薩僧中

に於て止住す。是の故に説いて清浄世界と名づく。已に

第三地に入る菩薩、観自在力に由るが故に彼しこに於て

生を受け、異生及び異生に非ざる声聞独覺、若しは異生

の菩薩彼しこに生ずることを得ること有ること無し。

と云い、更に世親菩薩の『無量寿経優婆提舍願生偈』一卷、

謂わゆる『浄土論』或は『往生論』と呼ばれるものに、初の

偈に先づ「彼の世界の相を觀するに、三界の道を勝過す」又

「大乘善根界」とあつて、この前提のもとに、

女人及び根缺二乗種生ぜず。（大正蔵二六、二三一頁上）

とあるから、安養世界報土説は唯識宗家としては原初的な説

であり、諸論これを受けて当然報土説を建立している。殊に慈恩一家の華胄というべき智周大師がこれに背くとは考えられないことである。されば『同学鈔』（五八六頁上）にはこれを、

慈氏・無着・天親・無性・護法・親光、稟承次で有つて唯報土の義を存せり。慈恩・淄淵の解釈深く此の旨を存す。但異生彼の土に生ずるといつば、別時の意趣対治秘密に依つて説くなり。即ち瑜伽・撰論の意なり。

と会通している。次に父母王国の文については前に挙げた『仏土義林』を引いて後に、

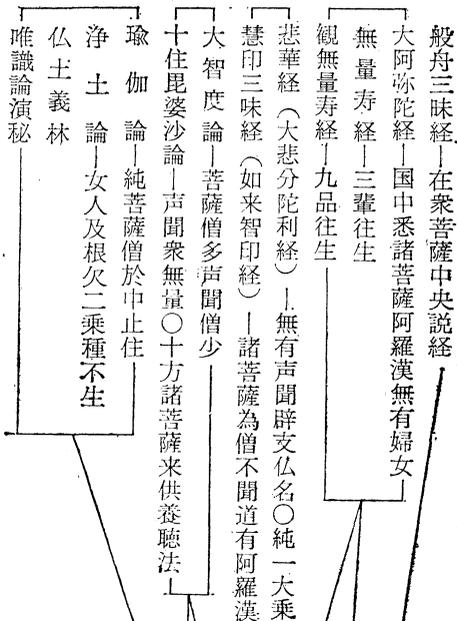
意の云く、報身の仏、分段身を化せんが為に更に父母王城等を現するなり。中三品の羅漢等は実には是れ菩薩なれども声聞の名を借る。是れ則ち諸仏及び諸大菩薩、声聞の形を現するなり。

猶「今同前説」について多方面より会通に努めているが、故佐伯定胤和上より、この「同」の字は秘主の評量の言葉ではなく、前の観経等の説に同じという意であつて、即ち今の論は観経の如く対治秘密別時の意趣と会すべきだと云う義を慰懃面授を蒙つた。この説に依る時は『演秘』の釈は、唯識宗

家共許の実義に背くものでないこと明かである。聊か煩わしく論じたが、唯識家の立場は安養報土説なることを立証し得た。

四

以上考えて来たように、經に於ては『大阿弥陀經』『無量寿



經』『觀無量寿經』、論に於ては『大智度論』『十住毘婆沙論』等が声聞衆の雜居を許し、又經に『般舟三昧經』『悲華經』『慧印三昧經』、論に『瑜伽論』『淨土論』等が純菩薩の土と見ているのである。經論成立年次の問題もあり、かかる見解については猶異論もあろうが、唯報土説と報化兩土に通ずる説とに分つてこれを図すれば、次の如くなる。

報土  
化土

弥陀淨土を説く經典に於ても、往生淨土の機は三輩・九品

と次第に増広され来つたものが、『悲華經』等に於ては弥陀の

浄土は純菩薩のみ止住し得る所と限定されている。父母妻子を帯し、或は補処の菩薩に托して入涅槃する阿弥陀如来の浄土に、十八円満の功德を構成要素とするに至つて、二乗凡夫の介在を容認しがたくなつたのであろうが、そもそもこれは浄土設定本来の意義を喪失したるものではなからうか。『唯識論同学鈔』はこれを難じている。(大正蔵六六、五八六頁中)

二乗異生実には彼の土に生ぜずんば、一代の諸教に安養往生を勧むる、何の益有らんや。

その証として『起信論』修行信心分の阿弥陀仏を念じて往生する説、『浄土論』の未証浄心の菩薩を地前と解しての往生説等を挙げて、二乗異生の安養世界往生の可能を詰めるのである。勿論答の義はこれを一一に破斥して宗の正義に帰せしめているが、印度以来のこの思想が日本にも継承されて、浄土教諸家の両義となるのである。宗教の神聖を想いその道の厳肅なるを誇とする者は、二乗異生の当位にての往生を欲ばないであろうし、宗教を広く庶民のものたらしめねばならぬと望む者は、見諦の後にあらずば浄土の相も窺えぬような迂遠な途は、到底堪えられぬところ、宗教の道は本質的に行じ易きものたるべきを極成せんとするであらう。結局は道に入

らんとする人の意樂に任さねばならぬことではあり、且安養世界へ往生するその往生の条件をも検討せねばならぬことではあるが、往生浄土の道、果して多くの階次を経ねばならぬ峻峻狭隘なるものであろうか、或は汪洋たる大海を快晴の追風に乗つて、愉快な船旅をするように安易なものであるか。これは安養世界の実存を論ずる界繋分別或は指方立相などの論理と共に、教を奉ずる行者の心の決定の問題として、さらには行自体を方向づける概念の問題として、直接的な意義を持つ、慎重に判断されねばならぬ重要な課題である。この課題を解く上に、安養世界が唯報土か或は化土にも通ずるかの命題は、他の教義と脈絡を断つた、浮上つた独立の概念として生活から遊離したものではなく、密家における自性会因人の問題の如く、往生浄土を希願する教にあつて、普遍的要素に裏づけられた、実質的な性格を持つ厳肅な問題である。

粗漫ながら以上の安養報化の觀察を以て、高野山大学教授田中順照上人の一擧に供し、華甲を寿ぐ微意を標するよすがとし、且その懇篤なる示教を乞う次第である。